

書 評

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第1巻 自然と人間の環境史

宮本真二・野中健一編. 2014 年
海青社, 396p. 3,800 円+税
ISBN 978-4-86099-271-2

気候変動, 人口, 食料, 資源, エネルギー, 水, 生物多様性に分類される地球環境問題というリスクを背負いながら我々人間は, これから生きていかなければならない(石田・古川, 2014). これは, 産業革命以降, 利便性のみを追求してきた人間活動の肥大化がもたらしたものである. 言い換えれば自然搾取型の社会構造を作り上げてきた我々が, 自ら招いてしまった歪んだ自然との関係性であるともいえる. 我々の未来, すなわち持続的な社会構築のためには, 今後も変化しつづける自然とうまく付き合う以外の方法はない. 本書には, その解決方法の糸口になる指針を, 自然と人間の関係性を見つめなおすことに求め, 16の小章にわけて綿密なデータに基づいた議論が展開されている.

本書は, 世界各地のマクロからミクロまで, 自然と人間(あるいは社会経済)の関係について, 現状や実態の把握と, そこに至るまでの原因および因果関係について, 大きく3つの視点から論じられている.

第一の視点は「居住」. 臨海部(第1章), 平野～丘陵部(第2章), 小盆地(第3章), 砂漠(第4章), 山岳(第5章)を対象にして, 地球上の様々な地形に対応したひとの暮らしの実態やその潜在的思考をケーススタディーとして論じている. ここには, 自然堤防から大砂漠まで地形の様々なスケールに対応した居住のスタイルが記されている.

第二は「変化」. 変化しつづける自然環境に対して, 人類はどのように対応しながら, 社会を築いてきたのかが書かれている. 気候変動(第6章), 河川氾

濫(第7章), 山地斜面(第8章), 山地植生(第9章), 島嶼環境(第10章)といったテーマを, 歴史の変遷にポイントをおきながら, 人間は自然をどのように往^いなしてきたのかが記述されている.

最後は, 「自然災害」. 洪水(第11章), 火山噴火(第12章), 異常気象(第13章), 台風(第14章)のトピック毎にまとめられている. 各地域において災害を引き起こす地球科学現象に対して, 人々はどんな認識をもち, それらをどのように社会・生活に組み込んでい^いるのかが書かれている.

本書を通じてわかったことは, 今後, 人間が自然とどう向き合うのか? その解を持つことの難しさであった. しかしながら, 社会を発展・維持するために, 私たちは自然そのものと決別してきた. このことが今となって, プーメランのように我々へ重い課題として返っていることだけははっきりと理解できた. 「土地の高低に対する人々の意識が急速に薄れてしまったことで水害が起きる.(第1章)」, 「現在は東洋のガラパゴスと称される世界自然遺産になった小笠原諸島も, わずか60年前には略奪的な森林資源利用が展開されていた(第10章)」といったように, 自然と人間活動の関係は, 微妙なバランスの上で成り立っている. 人間が, その暮らしを変えることによって, 自然は「支えてくれる」ものになったり, まったく反対の「脅威」になったりする. そのたびに, 人間は自然との付き合い方について再考を求められる. 人間活動とはまさに自然との対峙, その繰り返しである.

その観点に立って、汽水域を俯瞰したとき、絶妙なバランスの上に成り立っている汽水環境の存在価値は何か、我々が汽水域を開発することや維持することの本質は何か、深く考えさせられる。かつて、経済発展のため、淡水・干拓事業によって姿を消さざるを得なかった場所が、いまや保全の象徴として残すべき人類的資産となっている。社会が目指すべき方向によって、その捉え方が容易に変化する汽水域。我々が汽水域を科学するという、その本質の理解を本書は促してくれる。

なお、本書は、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究全5巻シリーズの第1巻である。新進気鋭の地理学者が執筆の多くを担当している。本書の最後、第15,16章では、環境研究と地理学の関係について、これまでのあゆみや今後の展開、ひいては地理学そのものの存在意義について書かれている。地理学を学んだ筆者にとっては、本書から地理学の新しい潮流を感じずにはいられない。汽水域という複雑系を理解するため、日々努力しているみなさんにも是非お勧めしたい。

引用文献

石田秀輝・古川柳蔵 (2014) 地下資源文明から生命文明へ。東北大学出版会, 158p.

山田和芳 (ふじのくに地球環境史ミュージアム)